**田崎亮平**は既製品ではなく、自ら編み出した樹脂をおろし金と蒸し器に貼り付けた立体を出品した。人工物と鉱物の出会いと離別を、これからどのように展開させるのか。

**山本三花**はキャンバス、油彩、オイルパステルの作品を 2 点。昨年 8 月の個展に比べて超小型の画面だが、勢いは失われていない。もっと地下へ潜ることを期待したい。

**ミリツァ・ニコリッチ**は小型デジタルプリントを 12 点。去年 6 月の個展では、凝縮した世界観を私は発見できなかった。次は極寒の宇宙を、極小の大画面で見てみたい。

**一色映理子**はキャンバス、油彩を 3 点出品した。昨年の 16 人展と同じ主題に見えるが、コンセプトがまるで異なると解釈できる。この独立性を如何に育むのかが問題だ。

**小林清乃**はコットン生地を支持体に刺繍糸を 1 点、ポリエステル糸と D プリントを素材とした計 3 点をインスタレーションした。皮膚感と概念の関係性を転じて欲しい。

**小泉成理**は綿布に香料を塗り、香る作品を 3 点出品した。昨年 4 月の宇野ゼミでは人体を宙に浮かせた。記憶を置き換える手法の今後が楽しみだ。もっと離れてもいい。

**岩崎雅**は自画像を 1 点、出品した。昨年 6 月の個展には見られなかった方法論だ。ストレート写真は更にストレートになることを追求して欲しい。そして何が真直ぐなのかも。

**北原克之**は紙に油彩＋コラージュを 2 点、インクを 1 点。昨年 4 月の個展とは全く異なる作品だ。何者も表さないコラージュが素晴らしい。ペン画も素直に好感が持てる。

**島花梨**はキャンバスに油彩の作品を 5 点。織物のような色面は複雑な想像力を喚起する。昨年の 16 人展の作品と比べると形へのこだわりを消した為、この探求が可能となる。

**小出恵理奈**は紙に水彩の作品を 5 点。流れる滲みと固定された細密感は、水彩に相当精通している感触を受ける。ここまで描けるのであれば、更に大胆不敵な作品が見たい。

**大森梨紗子**はパネルに油彩の作品を 5 点。昨年の 16 人展の主題が更に磨き掛かった印象を受ける。微細な色に対しより深い意義を与えると、伝えたいことが明確になる。

**水島ゆめ**は光沢紙にデジタルプリントの作品を 6 点。自画像を分断し反復する立体写真はどこまでも自らの視線を避ける。昨年の 16 人展は立体であったが今年は壁面へ。

**カン・ソニョン**は紙にアクリルの作品を 3 点。陰影という深みが現れてきた。この陰影が自ら浮かび上がるのか、アジアの果てなのか、徹底的に追求して戴きたい。楽しみだ。

**纐纈令**はパネルにアクリルの作品を 2 点。昨年 11 月の個展がまだ瞼にある。今回は描くことに躍起になる点が素晴らしい。考える前に描き捲るのだ。すれば考えられる。

**五影華子**はキャンバスにアクリル、油彩の作品を 2 点。昨年 4 月の宇野ゼミで見せた染みは複雑に絡み合い、押し寄せる波の如く深みを生み出している。様々にやって欲しい。

**杉山佐和子**は紙に鉛筆、胡粉の作品を 5 点。コンセプトは昨年の 16 人展と同様に感じるが、容という概念に固執しているようにも思える。そこを鋭利に武器にして欲しい。

**小口あや**はキャンバスに油彩の作品を 3 点、展示した。昨年 8 月の個展よりも、作品が良い意味で荒々しく見える。一度形成した自己を徹底的に破壊しても、自己は残るのだ。

一年ぶりの「on the steps」である。この間に個展を開いた者もあれば、一年ぶりの展示の者、初出品した者と様々である。自身としては大きな転機を迎えた者、着実に自己の追求を施している者、深く停滞し思い悩んでいる者と個々に異なるのであろう。しかし総じて顧みると、個々の作品の力が弱い。あくまで個々としてしか成り立っていないのだ。つまり、先ず時代を象徴していない。如何なる困難が目の前にあっても、それを凌駕する勢いが欲しい。次にグループ展なのだから、自己を捨てて挑戦をして欲しい。更に必要なのは、この世の中を変革させるという野心である。美術とは、作品とは、そこから生まれてくる筈だ。

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-4-13 琉映ビル 5F Tel&Fax 03-6628-6195 http://www.stepsgallery.org/